第６話　ついにブラジル！　律、白山をめざす！！

　銀波港から出港した７人を乗せた軍船は長い航海の後に、漸くブラジル・サントス港に到着しました。出港後２ヶ月と１５日が過ぎ、季節は渚が眩しい夏を迎えていました。凜は道中怖い思いもしたが、初めて見る海の青さや夕日の美しさ、波の音、潮風の香りに心は癒されました。夢は飛び交うカモメやウミネコに餌をやることを愉しみ、相変わらず凜のことは気に掛ける様子もありませんでした。「夢さんは、つれないひと・・・」ぼんやり凜は夢の後ろ姿につぶやきました。

　下船後、７人は港から移動手段として２頭立ての馬車に乗り込みます。馬車はその後、剛と律の母が待つ白山を目指します。蹄の音は軽やかにサントスの街を駆け抜けていきます。行きかう人々は、馬車に乗った着物姿の愛たちを珍しそうに見て、「こんにちは、おはよう、ありがとう・・・さよなら。」知っているだけの日本語で話しかけてきます。「剛さん、ブラジルの人は陽気で楽しいわね。でもなぜ日本の言葉を知っているのかしら。」愛が何にでも興味を示す剛に話しかけました。「アミーゴ、アミーゴね！」と剛は答えにならない生返事です。数時間馬車に揺られると、夕焼けが西の空を真っ赤に染めていました。「ブラジルの夕日は、とてもきれいですね。律さん・・・」賢はロマンチストでもありフェミニストです。「そうかしら賢さん・・・富士山の夕日だって涙するほどよ。」律は夏の夕暮れ、赤富士に感涙したことを思い出していました。秀は夫々の言葉のやり取りを楽しみ、様々な思いで彼らの話を聞いていました。夜のとばりが下り、辺りはすっかり闇です。剛は道の少し先にランプの火が灯る古びた宿を見つけました。「本日の宿はここにしましょう。」と剛が馬車からランタンを外すと、皆の足元を照らし宿へと案内します。その夜、皆長旅の疲れもあり、簡単な食事を済ませるとそのまま眠りにつきました。翌朝、ニワトリの甲高い鳴き声で７人は目が覚めます。愛は窓を開けると広々としたのどかな牧草地にあらためてブラジルに来たことを実感するのでした。律は「もうすぐよ、お母さん・・・必ず助けるわ。」と十字架を握りしめ朝陽に誓います。「皆さん、本日の移動は馬車でなく、牛が引く牛車です。山間部に入っていきますので、力強い牛が馬よりも頼りになります。」と愛想よく御者が説明をします。そして手綱を手にすると牛車は山道へと向かうのでした。７人を乗せた牛車が山腹まで来ると、剛は皆に声を掛けます。「だいぶ上まで上がってきました。ここから白山まではまだまだありますが歩きます。律、白山までの案内を頼む。」律はその昔、老婆に教えてもらった道を思い出しなが

ら、険しい山道を登っていきます。下界はもう雲で遮られて視界が徐々に悪くなります。やがて風は強くなり身動きが取れないくらい吹き荒れます。「Gooooo・・・Gooooo・・・」悪魔の叫び声のようにも聞こえます。「凜さん、大丈夫ですか。」飛ばされそうで岩陰にいる凜に夢が手を差し伸べます。凜が夢の手を掴むと夢は一気に胸元に引き寄せます。「寒いわ・・・」夢は凜を強く抱き寄せます。その後風は吹雪へと厳しさを増します。「これを飲むと体が熱くなるよ。」と言って愛は体が温まる護身薬を皆に渡します。しかし吹雪は一向に止む気配はありません。先頭の律が一歩踏み出した時です。「何をしに白山に来たーっ！」と唸り声がこだまします。吹雪の向こうに律は見覚えがある老女を見つけます。
「えっ？あなたは・・・」律の身体は強い驚愕のあまり動けなくなりました。　　つづく